

1~5の——線部のカタカナを漢字に直したとき、その漢字と同じになるものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

1 知識のなさをジセイした。

ア 中学生はセイフクを着る。

イ 病院でセイミツ検査を受ける。

ウ 家臣はチュウセイシンが高い。

エ 高速道路はキセイラツシユだ。

オ 明るいセイカクは得をする。

2 運命に身をユダねる。

ア 学級イインがクラスをまとめる。

イ キャプテンにニンメイされる。

ウ 銀行でヨキンをおろす。

エ 練習場所をテイキヨウしてもらった。

オ 年上にはケイイをもつて接する。

3 このビルはカイシユウ工事中です。

ア 首相のキョシユウが内外から注目される。

イ 体だけではなく精神のシユウレンも必要だ。

ウ 混乱した事態のシユウソクを図る。

エ 苦しくてもシユウシ笑顔で過ごす。

オ オリンピックは四年シユウキで行われる。

4 その学者は新しい説をトナえた。

ア 昔の教育制度をケンシヨウする。

イ 試合に負けたシヨウシンをいやす。

ウ シヨウチクバイはめでたいもののシンボルだ。

エ 小学校から聞こえるガツシヨウの声。

オ その手続きには会社のシヨウニンが必要だ。

5 現代の町からはセントウが姿を消してしまった。

ア 健康のためにトウニユウを飲む。

イ 生徒会長にトウセンした。

ウ 国のあり方に一石をトウじた。

エ 国会で大臣がトウベンする。

オ 箱根にトウジに行く。

【二】 次の各問いに答えなさい。

問一 次の（１）～（５）に当てはめるのに最もふさわしい言葉を、あとの【語群】から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、ア～オの言葉はそれぞれ一度ずつしか使いません。

- ・環境のためにも資源を（１）させることが重要だ。
- ・倫理的な観点から（２）技術には否定的意見がある。
- ・蚊が（３）となって伝染病が蔓延するおそれがある。
- ・日本人の偉業がさまざま（４）を通じて報道された。
- ・大雪の影響で野菜が（５）高値になっている。

【語群】

- | | | | | |
|-------|------|------|--------|--------|
| ア 軒並み | イ 循環 | ウ 媒体 | エ メディア | オ クローン |
|-------|------|------|--------|--------|

問二 次の各文はいずれもある作品の冒頭部分である。それぞれの作品名をあとから選び、記号で答えなさい。

- ① 親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている。小学校にいる時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰を抜かした事がある。
- ② 僕の前に道はない 僕の後ろに道は出来る ああ、自然よ 父よ 僕を一人立ちにさせた広大な父よ
- ③ ある日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになっていらつしやいました。
- ④ 行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。
- ⑤ 春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

- | | | | | |
|-------|--------|------|---------|-------|
| ア 方丈記 | イ 蜘蛛の糸 | ウ 道程 | エ 坊っちゃん | オ 枕草子 |
|-------|--------|------|---------|-------|

問三 次の①と②は、それぞれある一字の漢字を説明したものです。それぞれが説明している漢字を組み合わせることができる熟語を答えなさい。

- ① 形声文字。部首はこころ。つくりはものの姿を見るという意味を持つ。心にもものの姿を見るの意味から、おもいうの意味を表す。
- ② 形声文字。部首はにんべん。つくりはものの姿という意味。人の姿・かたちの意味を表す。

〔三〕 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。字数指定のある問いは、句読点などの記号もすべて字数にふくみます。

現在世界には二〇〇種近い霊長類が生息しており、そのほとんどは毛づくろいをすることが知られている。もし毛づくろいが利他的行動として行われているのなら、いままでニホンザルで述べてきた互恵的なやりとりは、ほかの霊長類の種においても見られるはずである。さらにその現れ方にさまざまなタイプがあれば、それに基づいて生息環境との関連や、互恵性がどのように進化してきたかという過程をたどれるかもしれない。そこで、同じような分析をアフリカのサバンナにすむオナガザル科の一種であるパタスモンキーで試みた。

パタスモンキーはニホンザルとはいくつか異なる社会的特徴を持っている。まず、ニホンザルと違い、群れのなかにはおとなオスが一頭しかいない単雄複雌の群れを作る。また、ニホンザルを含むほかの多くの霊長類と同じように、オスが自分の生まれた群れを出てゆきメスが群れに残るという母系社会を形成するが、血縁個体間の社会的な結びつきが比較的弱いといわれている。毛づくろいは、ニホンザルほど母親や子どもに極端に集中することはなく、交わされる毛づくろいは血縁間でもっとも多いものの、比較的多数の仲間と交渉を持つ。敵対的交渉における援助などは血縁間でほとんど見られないが、これは子どもがニホンザルに比べて非常に早熟で、敵対的な交渉のときあまり母親の助けを必要としないせいかもしれない。そのほか、ほかの母親の新生児を抱いたり毛づくろいしたりする子守行動が頻繁に見られることで有名であり、出産期には生まれたばかりの赤ん坊をめぐって近接や追隨などの社会交渉が急増することが知られている。

このような種で予想されることは、血縁個体と非血縁個体との差が小さく、ニホンザルのような明確な違いが見られないのではないか、ということである。ニホンザルでは、ある特定の非血縁同士の組み合わせで交わされている毛づくろいが血縁同士の組み合わせに匹敵するくらい多くても、非血縁間の毛づくろいに特有の互恵的なパターンには大きな変化はなかった。これは、ニホンザルでは血縁と非血縁が明確に区別されていることを示している。ニホンザルほど血縁の結びつきが強くないと考えられているパタスモンキーでも同じように明確な区別があるとすれば、日常的な交渉こそ特別多くはないものの、血縁のサルはそのほかのサルとまったく違う存在としてとらえられていることになるだろう。

もう一つの興味深い予想は、新生児の出現によって毛づくろいのルールは大きく変化するだろうということである。生まれたばかりの赤ん坊が関心の的になれば、毛づくろいだけが交換されるのではなく、毛づくろいと毛づくろい以外の利益（ここでは新生児に対する接触や毛づくろいなどの子守行動）とが交換される可能性が考えられる。子守行動についてはさまざまな機能が考えられているが、子守行動を行うサルにとってどのような短期的なあるいは長期的な利益があるのかはあまりよく分かっていない。ニホンザルでは、赤ん坊が生まれるとメスたちの関心が多少集まるが、おとなメス間の毛づくろいのパターンそのものには大きな変化は起こらない。

A、パタスモンキーの場合、新生児への関心度は非常に高く、新生児との交渉はおそらくなんらかの将来的な、あるいは潜在的な利益と結びついているのだろう。もし赤ん坊に対する子守行動が母親以外のメスたちの利益となるのなら、メスたちは、母親に対して毛づくろいをしたあとに、その見返りとして母親に毛づくろいを催促するかわりに、子守行動をさせてもらおうとするだろう。従って、赤ん坊に対する子守行動が毛づくろいの前後に頻繁に行われるようになり、母親は相手から一方的に毛づくろいを受けることになる予想できる。

パタスモンキーの調査は西アフリカ・カメルーンのカラマル工国立公園で行った。この公園には数群が生息するが、調査対象となった群れは、おとなオス一頭、おとなメス六頭を含む一群で、追跡したのは群れ内のすべてのおとなメスである。調査期間を出産期（一月から二月）と非出産期（十月から十一月）にわけ、出産期には赤ん坊を産んだメスを約三〇時間、産まなかったメスを約二〇時間、追跡した。非出産期には、すべてのメスを約二〇時間追跡した。出産期には六頭のうち三頭が出産した。

分析の結果はいくつかの点でニホンザルと異なっていたものの、おおむね利他主義に関する理論から予想されるものと一致した。新生児のいない時期の非血縁間のやりとりには、ニホンザルと同じような互恵的なパターンが見られた。とくにあまり毛づくろいをしていないメス間では毛づくろいしたサルが相手に催促するだけでなく、毛づくろいを受けたサルが相手に毛づくろいを積極的に返すという、ニホンザルには見られなかったパターンが多かった。

B、利益を受けたメスが自分から相手に利益を返すという、先ほど述べた「受け手による互恵性」のきざしがパタスモンキーには現れていた。一方、母子間では、ニホンザルと同じように互恵的なパターンはまったく見られなかった。

毛づくろい交渉を始めようとするときには、母子間の毛づくろいでは相手に近づいた個体が毛づくろいを催促するというニホンザ

ルと同じパターンが見られた。一方、非血縁個体間で毛づくろいを始めるときには、ニホンザルで見られたような接近と催促の明確な傾向が見られなかった。これらの結果からいえることは、パタスモンキーにおいても、血縁個体と非血縁個体のあいだには互恵性という観点からみれば明確な違いが存在するというのである。

ところが、出産期になって新生児が現れると、予想通り新生児がいな時期とまったく違うやりとりのパターンが見られるようになった。赤ん坊を持つているメスに対してはほかのサルからの一方的な毛づくろいが見られ、母親⁴に対する毛づくろいの催促はほとんど見られなくなった。逆に赤ん坊持ちのメスは、相手から毛づくろいされたあとに、自分から積極的にやりとりを続けようとしなくなった。このような赤ん坊持ちのメスをめぐるやりとりには、血縁関係の有無はまったく影響⁵しなかった。ところが、毛づくろいを始める前や毛づくろいをしたあとの子守行動を調べてみると、非血縁間での毛づくろいの前後には、血縁間の場合よりも、子守行動が多くなった。一方、赤ん坊のいない組み合わせでは、出産前と変わらないパターンが見られた。これらのことは、毛づくろいのやりとりのなかで、赤ん坊への接触や子守行動という毛づくろい以外のものが、利益として交換の対象となることを示している。

C

、非血縁個体間では、そのようないくつかの異なる行動を含めて互恵的なやりとりをしているらしいのである。

毛づくろいの機能から考えれば、赤ん坊を持つているサルに対して一方的な毛づくろいが見られるのは、赤ん坊に触^{さわ}ったりできるように、相手をなだめているのだということも考えられる。もし相手をなだめるためなら、毛づくろいをしてから子守行動をしようとするだろう。しかし、パタスモンキーでは、むしろ子守行動をしてから母親を毛づくろいすることが多く、この予想にはうまくあてはまらなかった。つまり彼らは、

D

。「赤ん坊に触らせてもらったからかわりに毛づくろいをする」、あるいは「毛づくろいをしたから触らせてもらえる」という認識⁶を、彼らは持っている可能性が高い。

毛づくろいのやりとりについて、パタスモンキーとニホンザルのあいだに見られたもつとも顕著な違いの一つは、非血縁間で毛づくろい交渉を始めるときの振舞^{ふるまい}いだろう。

パタスモンキーでは、相手⁵がやりとりの少ない個体の場合、毛づくろいをした側だけでなく、毛づくろいを受けた側も積極的に

返しをしようとする。もしこのことがパタスモンキーの社会で確実に行われているのなら、交渉の始めに催促された個体が催促に応じて毛づくろいをしてやっても、お返しをしてもらえないという危険はそれほど大きくはならない。パタスモンキーがやりとりの少ない相手と毛づくろいをする場合には、する側とされる側の両方が互恵的なやりとりを支えているため、ニホンザルのように最初に相手を毛づくろいしてからやりとりを始める必要がないのかもしれない。

では、なぜこのような「受け手による互恵性」のきざしがパタスモンキーで見られるのだろうか。この問いに対する十分な答えはまだ得られていない。ただその理由の一つには、群れと群れとの敵対的交渉が頻繁に起こるために、群れのなかでは、非血縁個体同士の間で日常生活的なかで大きな位置を占めていることがあげられるかもしれない。血縁関係が希薄^{さくはく}なのではなく、逆に群れの内部でのそのほかの関係が比較的強いということである。ただし、そのような結びつきを支えているのは、血縁間で見られるように親子関係などに発する親和性を基礎^{きそ}に社会交渉を長期間重ねることによって関係を形成し維持^{維持}してゆくといったやり方ではないようである。むしろ、受けた利益を自発的に返すことによって結びつきを強めるといった、非血縁間に特徴的な互恵性そのものをさらに発展させたものなのであろう。

この両種に見られたもう一つの顕著な違いは、パタスモンキーのおとなメスたちが示す新生児への高い関心によって、ニホンザルでは毛づくろいのなかだけで成立すると考えてきたやりとりのルールが一時的に崩壊^{はなれ}することである。しかしながら、たとえルールが崩壊した場合でも、非血縁個体とは互恵的なやりとりをするという原則は、ほかの行動を含めた形で成立していた。この結果から考えられることは、このような短期的な互恵性は、霊長類が非血縁間で利他的な行動をやりとりする場合に常に成り立っている可能性⁶があるということである。

これまで述べてきたニホンザルとパタスモンキーの分析によって得られた結果は、霊長類一般^{いっぺん}に対して、毛づくろいを利他的行動として扱い、そのやりとりのパターンを分析することの有効性を示している。さらに、パタスモンキーの分析では、毛づくろいがほかの社会行動と交換される場合があることも明らかになった。今後さまざまな種で同様の視点からの分析が行われれば、さらに互恵性についての議論が深まるだろう。

- *1 利他……………自分を犠牲にして他人に利益を与えること。
- *2 互恵……………互いに都合のいい利益を与えたり、受けたりすること。
- *3 近接……………近づくこと。接近。
- *4 追隨……………あとからついていくこと。
- *5 先ほど述べた…この問題文章より前の文章で述べられていること。

問一 本文中の A C にあてはまる言葉として最も適切なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア そして イ しかし ウ もちろん エ なぜなら オ つまり

問二 — 線部1「パタスモンキーはニホンザルとはいくつか異なる社会的な特徴を持っている」とありますが、「パタスモンキー」に見られる「ニホンザルとはいくつか異なる社会的な特徴」とは何ですか。適切でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 敵対交渉時に母親の助けを必要としない。
- イ 母系社会を形成する。
- ウ 非血縁の新生児への子守行動。
- エ 非血縁関係が比較的強い。
- オ 単雄複雌の群れを作る。

問三 — 線部2「このような種で予想されること」とありますが、予想されることとして適切なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 血縁と非血縁では生息環境に大きな違いが見られること。
- イ 血縁よりも非血縁同士の毛づくろいの回数が多くなること。
- ウ 母親ザルが血縁同士の互恵性を深める役を担っていること。
- エ 血縁同士の社会的な行動に変化が見られにくくなること。
- オ 毛づくろいのルールが赤ん坊の出現によって変わること。
- カ サルの新生児が毛づくろいし始めるまでの時間が短いこと。
- キ 血縁のサルと非血縁のサルの行動に差があまりないこと。

問四 ―線部3「パタスモンキーにおいても、血縁個体と非血縁個体のあいだには互惠性という観点からみれば明確な違いが存在するということである」とはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ニホンザルは非血縁同士でどんなに毛づくろいを多くし合っているとしても、そのやり方が血縁同士のパターンと同じにはならな
いのと同様に、パタスモンキーも毛づくろいのパターンで血縁個体なのか、非血縁個体なのかが変わること。

イ パタスモンキーもニホンザルと同様に血縁、非血縁の両者と毛づくろいをするが、パタスモンキーは新生児への関心が非常
に高いため、新生児をもつ母親との毛づくろいの場合にはニホンザルと明確に違ったやり方をするということ。

ウ 血縁、非血縁で毛づくろいのやり方に大きな違いの見られないニホンザルのように、血縁個体間の社会的な結びつきが比較
的弱いパタスモンキーは、血縁個体が相手であっても非血縁個体が相手であっても行動に違いは見られないということ。

エ パタスモンキーの非血縁間のやりとりはニホンザルと同様の互惠性があり、頻度の低い相手と毛づくろいをする場合には積
極的に毛づくろいを返すという行動を通して、血縁関係、非血縁関係で生じる相手への態度の差をうめ合っているということ。

オ ニホンザルもパタスモンキーも血縁個体同士の結びつきが強いということは共通しているが、パタスモンキーには「受け手
による互惠性」という特有の性質があるため、利他的で互惠的な行動という点でははっきりとした違いがあるということ。

問五 ―線部4「母親に対する毛づくろいの催促はほとんど見られなくなった。逆に赤ん坊持ちのメスは、相手から毛づくろいさ
れたあとに、自分から積極的にやりとりを続けようとしなくなった」とありますが、その理由を説明している部分を解答欄の
「くから。」に続くように四十字で探し、その最初と最後の五字をぬき出しなさい。

問六 本文中の D にあてはまる内容として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 毛づくろいを通して「受け手による互惠性」を進化させて考え、自分が利益を得るためには、まず相手に利益を与えよう
というわけである

イ 血縁間であっても非血縁同士であっても、毛づくろいは子守行動をするための手段であるとしつかり認識しているとい
うことである

ウ 赤ん坊に触りたいという自己の欲求を満足させることを優先し、母親の持つ感情をないがしろにしてしまっているとい
うことである

エ 「受け手による互惠性」を持ちながらも、単なる子守行動を毛づくろいをするために交換可能なものとして認識している
わけである

オ 毛づくろいを単に子守行動をするための手段として考えているわけではなく、お互いに交換可能なものとして認識して
いるわけである

問七 ―線部5「相手がやりとりの少ない個体の場合、毛づくろいをした側だけでなく、毛づくろいを受けた側も積極的にお返
しをしようとする」とありますが、その理由として考えられることを十字以上二十字以内で説明しなさい。

問八 ―線部6「パタスモンキーの分析では、毛づくろいがほかの社会行動と交換される場合があることも明らかになった」とあ
りますが、どのような条件の社会行動となら「毛づくろい」は交換されると考えられますか。その条件を十字以上十五字以内で
答えなさい。

問九 これまでの生活の中であなたが経験した利他的行動とその感想を解答欄に収まるように書きなさい。

【四】次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。字数指定のある問いは、句読点などの記号もすべて字数にふくみます。

ゆつくりめの朝食を摂り、新聞を読む。

今日これから、たった二十分のパフォーマンスだけで評価されるのだ。一日中、いや年がら年中練習している、世界中の若い音大生たちと同じ土俵で。担当教授がつきつきりで、こと細かに指導し、コンクール対策を練ってきている彼らと一緒に。

そのことが不思議な気がした。普段の生活では有り得ないイベント。

そう考えると、ここ一年かつての恩師に頼んで何度も聴いてもらい、寸暇を惜しんで弾きこんできたものの、練習時間の差は歴然としている。その蓄積の差に、焦りを感じないではいられなかった。もつとも、この歳になると、ひたすら練習するだけが練習ではないし、工夫して量を質で補う方法もあると知っている。時間に追われるせわしない日常生活のあいだに練習時間をひねりだし、中身の濃い練習をしてきた精神力は学生に負けないし、ピアノを弾ける喜びを誰よりも感じてきたという自負もあるのだけれど。

てつきり自分が最年長だと思っていたのに、配られたプログラムで、自分だけが最年長ではないと知ってホッとしているのが我ながら滑稽だった。ロシアからのコンテストで明石と同年が一人、ひとつ下がロシアとフランスで一人ずついた。彼らはまだ学生なのだろうか。自分と同じように働いているのだろうか。どこの国でも、音楽だけで食べていくのは大変なはずだ。たぶん子供はいないだろうな。

長丁場のコンクールのために仕事を休むのは大変だったが、同僚も上司も応援してくれた。楽器店という商売を選ぶだけあって、自分でも演奏する者が多いせいだろう。わざわざ、今日の一次を聴きに来てくれるという人も何人かいた。本選に残ったらみんなで聴きに行く、と決めているらしい。

本選。その響きは憧れた。

学生時代、日本で最大規模、なおかついちばん権威のある音楽コンクールで、本選に残ったことがある。その時は五位入賞だった。そして、それが明石がこれまでに獲った最高位だった。

近年注目度が上がり、優勝者の特典も多い芳ヶ江だ。しかも、これは国際コンクールなのだ。世界中から強豪がやってくる。スケ

ールの大きな新人が次々出てくる中国。国家事業として芸術分野に予算を注力する韓国。両者のレベルアップはめざましく、今回もこの二つの国のコンテストがかなりの人数を占めていた。本選に自分が残れる望みは薄いと分かっている、やはり残りたかった。ピアノ協奏曲を、ショパンの一番をオーケストラと弾きたい。

今この瞬間、どの出場者もそう思っているに違いない。かつて子供の頃に聴いて憧れた、チャイコフスキーを、ラフマニノフを、グリーグを、オーケストラと一緒に演奏したいと。

思わず、全身に力が入っているのに気付き、ふっと溜息をつく。

リラックス、リラックス。一日は長い。今から気合いを入れてどうする。

立ち上がるとして、スニーカーの靴紐がほどけかけているのに気付いた。

しゃがんで結び直そうとしたが、結べない。

えっ？

明石は混乱した。いつも普通にやっているはずの、靴紐を結ぶという行為。

しかし、手はその行為を忘れてしまったかのように、もぞもぞと靴の上をさまよっていた。

どうしたんだ、俺？

ようやくこちなく紐を結び終えた時には、初めて靴紐を結わえたような気がして、十五分近く経っていた。

混乱したまま立ち上がる。

俺、上がってる？

全身からどつと冷や汗が噴き出してきた。

こんなことは今までなかった。かつて舞台に立った時のことを思い浮かべてみても、そりゃあ多少は緊張したけれど、こんなふう

に動揺した記憶はなかった。

明石はゾツとした。急速に不安が込み上げてくる。久しぶりの舞台。しかも、真剣勝負の。その舞台で。ピアノを前に、曲を度忘れして呆然としている自分の姿が、一瞬妙にリアルに目に浮かんできた。慌ててその姿を打ち消す。

そんなことはない。あんなに練習してきたんだ。忘れるなんてあるはずがない。今までだって、そんなことは一度もなかった。でも、こんなふうに靴紐も結べないほどに上がったことも、かつては一度もなかった。

冷たい声がそう囁く。

やっぱり、おまえはもう音楽家なんかじゃない。会社勤めをして、所帯を持って、すっかり焼きが回ってしまった。³生活者の音楽だなんて大層なことを言っていたが、やはりおまえは逃げただけだ。退路を断って音楽に向き合うことが怖くて、ただ脱^{だつ}落^{らく}したに過ぎないのさ。

それは、コンクールに出ることを決めてからこの一年、何度も胸の中で聞いた言葉だった。普通の生活があつてこそその音楽だとずっと思っていたはずなのに、しよせんは「酸^すっぱい葡萄^{ぶどう}」のようなもので、もし自分が抜きん出た才能を持っていたら迷わずプロの音楽家の道を選んだだろうし、それ以外の職に就くことなど考えもしなかっただろう。そして、そちら側にいたならば就職して所帯を持ち、「生活者の音楽」などと囁^{ささ}いている者をきつと軽んじていたに違いないのだ。

じゃあ、なぜ今自分はここにいるのだろうか？ 今ここにこうしている自分はいったい何なのか？

一瞬、足元が沈みこんでいくような凄^{すさ}まじい孤独を感じた。

演奏する時は誰しも感じる孤独だろうが、今明石が感じたものはこれから同じ⁴ステージに立つ他のコンテストたちや家族とも共有できない種類の孤独で、限りなく絶望に近いもののような気がした。

「高島君、おはよう」

声を掛けられて、反応するまで少し掛かった。

ようやく、雅美が取材に來たのだと気付く。

よりによってこんな時に。舌打ちしたくなるのを必死にこらえ、苦勞して表情を繕^{つくろ}った。

「ああ、おはよう」

声もぎこちなく、表情も全く繕えていなかったらしく、雅美が一瞬びくつとした顔をした。思わず目を逸^そらす。

撮^とられたくない。この女は、いったいなんの権利があつてこんなところまでやつてきて俺に向かつてビデオカメラを回すのだろう。

ここ数日、カメラが付いて回るのが鬱陶しく、煩わしく、雅美に憎^{にく}しみすら抱^{いだ}いていることに気付いていた。雅美もそのことに気付いていたと思うが、むろん、彼女も仕事なので遠慮するわけにもいかず、二人のあいだに少しぎくしゃくしたものがあつた。

だが無理だ。今日だけは、無理だ。ずっとカメラに付いてこられたら、自分がどんな罵^{のの}詈^ち雑言^{ざつごん}を雅美に投げつけるか想像もつかないし、ひどい言葉で罵^{のの}詈^ちするのを自分でも制御できないに違いない。

明石は息を深く吸いこんだ。

「ごめん、今日は」

硬い表情で思い切つて明石が言いかけると、雅美はそれを遮^{さへ}るように大きく頷^{うなづ}いた。よく見ると彼女はいつもの大きなバッグを持つていたものの、今朝はカメラを構えていなかった。

「今日は会場に行つて、関係者や他の出場者を撮^とってるね」

「ごめん」

そう言うのが精一杯だった。

「でも、高島君が出る前の楽屋と袖は撮^とらせてもらう。ここだけは撮^とらないと、番組にならないからお願いね」

雅美は簡潔にびしりと言った。

明石はホッとしつつも頷く。「分かった」

「グッドラック」

雅美はそう言つてすぐに引き揚げていった。拍子抜けした気分になる。

明石が出場前でピリピリしているのは、彼女もよく承知していたのだ。安堵^{あんど}するのと同時に大人げないな、俺も、と少し後悔^{こうかい}した。この程度でいっぱいになるようじゃ、学生コンテストとちつとも変わらない。一味違う大人の演奏をしようと思つていたのに、自分の許容範囲^{しやうりはん}の狭^{せま}さが情けなかった。

その一方で、雅美と話をしたことで、少し落ち着きを取り戻^{もど}した。

意識しながら、大きく深呼吸する。

そう、大人の演奏をするのだ。今自分が抱いている複雑な思いや孤独、音楽に対するアンビバレンツな思いをも演奏で表現すればいい。それが、最年長のコンテスタントの唯一のアドバンテージなのだ。

明石は背筋を伸ばして新聞を畳み、近くを通りかかったウェイトレスにコーヒーのお代わりを頼んだ。

(中略)

韓国人の女の子、中国人の男の子、韓国人の男の子。

出てくるコンテスタントは誰も皆上手である。近年アジア勢の伸びが凄いと聞いていたけれど、さっきのロシア人の女の子よりもアジアの三人のほうが明らかにパワーも技巧も勝っていた。

ほんとに皆上手だなあ。

満智子は溜息をついた。

そして、一次予選初日、最後の演奏者。

22 TAKASHIMA AKASHI

ネームプレートが入れ替えられ、満智子は思わず背筋を伸ばした。

動悸がいつそう激しくなった。

こんなに緊張したのはいつ以来か思い出せない。

思わず胃を押さえていた。

耳元で心臓の音がする。

あたしが出場者だったら、上がりまくってとても演奏なんかできないよ。いや、違う、自分が出場者でも、こんなには上がらな

かっただろう。

あんなところにたった一人で出てきて演奏できるだけでも、明石、あんたは偉い。

厚い回転扉が開き、サツと長身の明石が出てきた。

日本人出場者とあって、ひととき大きな拍手が湧く。

ステージの上で見る明石は、体格のせいだけでなく、とても大きく見えた。

思わず胃痛も忘れて感心する。

やっぱ、この人には生まれながらの明るく上品な雰囲気があるなあ。

満智子は、彼を初めて見るような気がした。

にこやかにきびきびと歩いてきて、明石はピアノの前に腰掛けた。

手を伸ばし、椅子の高さを調節する。前の出場者は小柄だったので、かなり椅子を下げている。

ポケットから白いハンカチを取り出し、鍵盤を少し拭き、自分の手を拭く。

あれは儀式なんだよ、調律師さんが入ってるから、鍵盤に汗が残ってるわけじゃない。気持ち落ち着けるために鍵盤を拭くふりをするのさ。

明石の声が聞こえた。

彼は額を軽く拭くとピアノの上にハンカチを置き、斜め上を見上げて動きを止めた。

大丈夫。落ち着いてる。集中してる。

満智子は一人で頷いた。

静かな目ではし宙を見ていた明石は、サツと弾き出した。

あつ。

満智子は目が開かれる思いがした。

それは満智子だけでなく、他の観客も同様だったようだ。やれやれ、やっと最後だという疲れた雰囲気だったのに、皆、覚醒して

背筋を伸ばしたのを感じた。

明石の音は、違う。同じピアノなのに、さっきの人とは全然違う。

明快で、穏やかで、しっとりしている。活き活きとした表情がある。

やはり、音楽というのは人間性なのだ。この音は、あたしの知っている明石の人柄がそのまんま表れている。明石という人の包容力の大きさが、音に、響きに宿っている。舞台の上の明石の周りに、広い景色が見えてくる。

平均律クラヴィーアの第一巻第二番。

どの曲にするか、ずいぶん長いこと迷っていた。候補を数曲に絞ったあとも、何度も何度も弾き比べ、プログラム提出ぎりぎりまで悩んでいた。

満智子はバツハを聴くと、いつも「宗教的な」という言葉を思い浮かべる。

詳しいことは分からないけれど、しんと心が静まりかえって、「祈る」ということを理解できるような気がしてくるのだ。

明石のバツハは、ずっと聴いていたいような心地になる。こちら心も静まってきて、謙虚な気持ちになってくる。しかし、バツハはあつというまに終わってしまった。

次はベートーヴェンのソナタ、第三番、第一楽章。

ソナタというのはたいへん重要な形式なのだそう。作曲家の力量を問われる、実力の顕れる形式なのだとも。

満智子は「月光」や「熱情」は知っていたけれど、正直、他のベートーヴェンのソナタを聴いてもピンと来なかった。

曲のための曲って感じだね。何か表現したいから作っただけじゃなくて、形式のために作っただけで感じ。

素人というのは恐ろしいものだ。満智子は明石が練習しているソナタを聴きながら、素朴な印象を述べた。

そう聞こえる？

明石は苦笑した。

うん。あんまり面白くない。

そうかあ、それじゃあ、俺が悪いんだなあ。

ばらばらとフレーズを弾きながら、明石は天井を見上げる。

どうして？ 作曲家のせいだよ。

満智子は気軽にそう言い、洗濯物を畳んでいた。

違うよ。こうして後世に残っている曲には、それぞれに曲としてのきちんとした必然性があるんだ。それを弾きこなせない、説得力のないピアノリストが悪いんだよ。

思いがけなくその声が厳しかったことが記憶にある。

満智子は、不意に涙が溢れてくるのを感じた。

明石の言った意味が分かったよ。

今、明石の指先から聞こえてくるベートーヴェンは、フレーズのひとつひとつが有機的に繋がりがいい、何かを訴えかけてくる。

そう、明石のピアノには説得力があるのだ。今のあたしには、ベートーヴェンが何を言いたいのかほんの少しだけ分かるような気がする。

ひとつの音も聴き逃すまいと満智子は集中したが、二曲目もあつというまに終わってしまった。

そして、明石の一次予選最後の曲はショパンのバラード第二番だった。

本当は、バラードの第四番を弾きたかったんだけど、時間が足りないんだよな。

そんなことを言いながら練習していた。

この上なく静かに優しく始まる曲だ。誰かが囁きかけているような、シンプルで美しいメロディ。この部分を聴いていると、明石が明人に絵本を読み聞かせているところを連想してしまう。

しかし、そんな長閑な光景は、思いがけなく激しいフレーズに破られる。

ドラマティックなメロディが、怒濤のように何度も寄せては返し、更に大きな流れとなって押し寄せてくる。

現実の厳しさ、険しさ。

タキシードを着て、美しいメロディを弾くためには、生きていくための仕事に忙殺され、果てしない日常を支えていかなければなら

らない。あそこに立つまでに、彼がどれだけ努力してきたか、観客たちは誰も知らない。

「これが最初で最後だから、頼む、挑戦させてくれ」

「パパは音楽家なんだって明人に言ってみたいなあ」

「今更誰にも頼まれもしないのにコンクールなんか出てどうするんだろうね」

「今だから弾けるものってあると思うんだよ」

「駄目だ、全然指がついてこない。気持ちばかり先走って、曲になってない」

「やっぱり、こんなことやめときゃよかった」

「説得力のないピアノリストが悪いんだよ」

「本選に残ったら、みんな聴きに來てくれるってさ」

「たくさんさんの明石の声、明石の表情が重なり合う。」

それでもなお、ピアノは、ショパンはこんなにも美しい。

バラードの二番は、明石の優しさと厳しさをそのまま表現しているかのようにだった。

(恩田 陸 「蜜蜂と遠雷」より)

*1 コンテスタント…コンクールに出場する人のこと。

*2 芳ヶ江……………今回のコンクールの開催地。架空のもの。

*3 雅美……………高島明石の高校時代の同級生。テレビ番組の企画でコンクール前から明石に密着取材をしている。

*4 アンビバレンツ…相反する感情が同時に存在しているさま。

*5 満智子……………高島明石の妻。

*6 明人……………高島明石の息子。

問一 ―線部1―「自分だけが最年長ではないと知ってホッとしているのが我ながら滑稽だった」とありますが、この時の明石の心情の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分と同年代のコンテスタントがいるのであれば、よもや自分が彼らに負けるわけがないと思い、自信を持って演奏に臨める状況に安堵したが、はじめから自分の敵は若い学生たちでその人たちを気にする必要があることを思い出し、そのことに気づけないほど緊張している自分をおかしく思う。

イ 自分と同年代で音楽をやっているのであれば、同じような生活や練習の苦勞をしてきているだろうと思い、その苦しみを共有できることの喜びを感じたが、彼らも学生かもしれないと考えると自分はやはり孤独であることを認識し、舞台では一人だという事実から逃げようとした自分をおかしく思う。

ウ 自分にしかできない演奏をしようと思っではいるものの、不安で周りのことが気になっていると、自分と同年代の出場者を見つけれ緊張がほぐれたが、結局はそのような人たちとも争わなければならないと思い、できることをやるしかないという当たり前のことを忘れていた自分をおかしく思う。

エ 自分には学生に負けない練習をしてきた自負があるが、そういう練習を積んできた出場者が他にもいることに気づき、無理矢理自分を落ち着かせようとしながらも、全体を客観的に分析できるほどの余裕があることを自覚し、コンクール出場に不安を覚えながらも余裕がある自分をおかしく思う。

オ 年齢に負い目を感じていたが、自分と同じような年齢でもコンクールに出場している人がいることを知り安心感を覚えつつも、歳をとったからこそいい演奏ができると自信を持って臨んでいるはずが他人の年齢を気にしていることに気づき、本番を前に気持ちの矛盾を覚えた自分をおかしく思う。

問二——線部2「明石は混乱した」とありますが、それはなぜですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 普段はできていることが突然できなくなってしまったから。
- イ 靴紐の結び方を忘れたのと同じように曲も忘れてしまったから。
- ウ コンクールの前に靴紐がほどけるのは縁起の悪いことだから。
- エ 靴紐を結べないくらい自分が緊張していることを自覚したから。
- オ 自分が本選に出場しているところが想像できなかったから。

問三——線部3「生活者の音楽」とありますが、明石が目指す演奏はどのようなものですか。本文中の中略より前から探し、十字以内でぬき出しなさい。

問四——線部4「同じステージに立つ他のコンテストたちや家族とも共有できない種類の孤独」とは、どのような気持ちからくるものですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア なぜピアノを弾くのかわからないという混乱。
- イ 後がない者にしか理解できない本番前の緊張。
- ウ 自分の才能のなさを実感したことによる挫折感。
- エ 練習時間が圧倒的に不足していることへの不安。
- オ 他のコンテストとの境遇の差による嫉妬。

問五——線部5「今朝はカメラを構えていなかった」とありますが、それはなぜですか。三十字以上四十字以内で説明しなさい。

問六——線部6「素人というのは恐ろしいものだ」とありますが、明石がそう感じたのはなぜですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分自身も気づいていなかった表現力の低さを何気なく言い当てられてしまったから。
- イ 気にして練習している曲の解釈の欠点を的確にとらえられてしまったから。
- ウ 一生懸命練習しているのに無遠慮に思ったままの感想を言われ傷ついたから。
- エ 曲に対する知識の低さを作曲家のせいにして芸術の意義を理解しようとしないうから。
- オ 現代まで弾き続けられている理由を演奏者の力量を問うためだという本質を見抜いたから。

問七 ―線部7「満智子は、不意に涙が溢れてくるのを感じた」とありますが、このときの満智子の気持ちを三十字以上四十字以内で説明しなさい。

問八 本文中の に一文を加えるとしたら、あなたなら次の①と②のどちらを選びますか。どちらか一方を選び、解答欄に収まるように選んだ理由を書きなさい。なお、どちらを選んだとしても点数に差はつきません。

- ① 「曲が終わり、瞬間、万雷の拍手が会場を包んだ。」
- ② 「曲が終わり、一瞬、真の静寂が会場を包んだ。」

東大クラス選抜Ⅰ

解答用紙
(50分)

氏名

受験番号

整理番号

得点

受験番号

整理番号

得点

A	
	—
	1
	2
	3
	4
	5

二		
問三	問二	問一
	1	1
	2	2
	3	3
	4	4
	5	5

[illegible]

L	K	J	I	H

四													
問八		問七		問六		問五		問四		問三		問二	
理由		記号											